

オッチョとチョコと赤いくつ

角田光男・作 箕田源二郎・絵



913

角田光男

オッチョとチョコと赤いくつ

小峰書店 1976(昭51)年

126p. 22cm (こみね創作童話・1)

基本カード記載例

オッチョとチョコと赤いくつ

1976年10月31日 第3刷発行

著者 ^{かく た みつ お} 角田光男

発行者 小峰広恵

発行者 株式会社 小峰書店

〒160 東京都新宿区舟町6

☎東京 357-3521(代表)

本文印刷 株式会社 厚德社

表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製本 小高製本工業株式会社

©1976 角田光男・箕田源二郎

8393-6501-2349

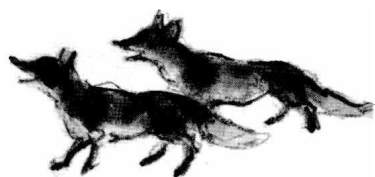
オッチョとチョコと赤いくつ

角田光男・作 箕田源二郎・絵



小峰書店





はじめに

山の村に、大雪おおゆきがきました。

けいちゃんは、ひとりぼっちになつて、こまっています。オツチヨとチヨコは、なかよしのけいちゃんを上げまそうと、じゅつをつかいます。

ケサラン パサラン

ながぐつに なあれ

でも、まだ子ギツネです。うまくばけることができません。そこで、いっしょうけんめいにけいこをします。

はじめに・5

1 おおりのき
大雪の朝・10

2 ももの木屋のぴかぴかぐつ・23

3 けいちゃんたずねて・38

4 四ばんめのお客は・50



5 オツチヨとチヨコ・61

6 ながぐつどろぼう・72

7 とうさんからののがき・83

8 オツチヨたちのやくそく・94

9 プレゼントはだから・106

10 雪^{ゆき}の一本道^{いっぽんみち}・117

あとがき・124

装幀・さし絵 箕田源二郎



*** 著者紹介**



角田光男 かくた みつお 一九二四年新潟県に生まれる。

新津市における二〇余年の教員生活を経て一九六六年上京、以後創作活動が続ける。著書に「まるはなてんぐとながはなてんぐ」「つむじまがりへそまがり」「やぶれだいこ鬼だいこ」など多数。

現住所／東京都練馬区大泉学園二六〇七

*** 画家紹介**



箕田源二郎 みただ げんじろう 一九一八年東京に生まれる。

日本美術会委員、童画ぐるーぷ〈車〉同人。「ごんぎつね」「へえ六がんばる」「火」などの絵本、「アーコも転校生」などのさし絵を手がけるとともに、「美術との対話」「美術の心をたずねて」などの著作がある。

現住所／東京都新宿区上落合三一一一―一三

オツ
チヨと
チヨコ
と赤い
くつ



Ⅰ 大雪の朝

けいちゃんは目をさますなり、戸口へいきました。戸をひきあけたら、もっていた雪が、足もとまでくずれおちてきました。

しめしめです。雪は、けいちゃんのこしの高さほども、つもっています。これなら、学校へいかなくてもすみそうです。

十二月までに、まだなん日もあります。それなのに、こんな大雪になっしまいました。きのうの昼から、ふりはじめた雪です。けさは、ゆうべよりも、ぐんとはげしくなっています。大きな雪ひらの、ふれあいながらおちてくる音が、ギンギン、ザンザンとひびいてきそうなほどです。

けいちゃんは、にこにこしたい気もちをかくして、朝ごはんをたべはじめました。

ところがどうでしょう。六年のたつちゃんと、げんちゃんが、わざわざむかえにきたではありませんか。

「明子先生がまってるんだ。早くいこう。」

土間へはいつてきたたつちゃんたちは、アノラックも、ズボンも雪まみれで、雪から生まれた雪ん子のようでした。

けいちゃんは中川けい子といって、二年生です。うちは、七つ山とめしもり山とのあいだの中原に、ぽつんとたっている一けん家です。学校へは、七つ山のふもとをまわって、二キロも歩かねばなりません。とうさんは、東京へはたらしきにいつているし、かあさんは病気です。だから明子先生が、たつちゃんたちになので、むかえによこしたものでしょう。

「ごうぎに雪がふってね、こまっていたところですて。おかげさんでたすかりますでね。」

にこにこ顔にかわったのは、かあさんでした。すぐさまアノラックをとってきて、けいちゃんにきせかけました。

「学校へなんかいかない。」

けいちゃんは、からだをゆすりました。

「どうして？」

「どうしても。」

こんな日に学校へいったら、うちへもどれなくなってしまうでしょう。そうになったら、しんるいの西やしきに、とめてもらうほがありません。

けいちゃんは、西やしきのうちが、大きいです。あそこには、うるさいおじいがふたりもいます。ほんおじいと、ちんこおじいです。それにけいちゃん



は、かあさんとわかれて、くらしたく
ありません。また、やっとなかよしに
なったオツチヨや、チヨコと、さよな
らになってしまうのも、いやでした。

けいちゃんの村は、新潟^{にいがた}県の西^{にし}の山
おく、中里^{なかざと}とよばれるところです。三
メートルから、四メートルも、雪^{ゆき}のつ
もる年があります。

きよ年の冬^{ふゆ}は、けいちゃんとかあさ
んで、学校のそばの保育所^{ほいくじょ}をかりてく
らしました。ひやくしようしごとのい
そがしいときだけの保育所^{ほいくじょ}で、冬^{ふゆ}はあ

き家^やになつていたからです。

ところがことは、とりいれのとくに、かあさんがこしをいためてしまいました。ばあちゃんのように、こしをまげて歩^{ある}かねばなりませんし、重いものをもてません。もう少^{すこ}しなおったなら、保育所^{ほいくじょ}へひっこそうといつてるうちに、この大雪^{おおゆき}になつたのです。

かあさんのぐあいが悪^{わる}くても、とうさんは、東京^{とうきょう}いきをやめるわけにいきませんでした。山おくの村^{むら}なので、田^たんぼや畑^{はたけ}が、少^{すこ}ししかありません。冬^{ふゆ}のあいだのでかせぎで、お金^{かね}をとらないと、くらしにこまるためでした。

「すずちゃんと、とみちゃん、もう、学校へきていたよ。」

けいちゃんの気をひきたたせるように、たちちゃんがいました。

「それに、昼^{ひる}になつても、雪^{ゆき}があがらなかったら、たちちゃんたちが、また送^{おく}つてきてくれるって。」

かあさんはしきりになだめ、小さくなったながぐつを、けいちゃんの足に、ぎゅっぎゅっとはかせました。

外そとは白というより、はい色いろばかりのせかいです。すぐ目の前まえの七ななつ山と、めしもり山さえ、うすぼんやりとにじんでいます。

「ほら、たったいま歩あるいてきたところが、もううまりかけてる。」

「こんどは、ぼくがせんとうになろう。」

げんちゃんがさきになって、歩あるきはじめました。たっちゃんがそのうしろで、けいちゃんばかりです。

「あっ！」

けいちゃんは、ときような声こゑをだして、うちへかけもどりました。

「ランドセル！」

学校へいくというのに、けいちゃんのかたには、ランドセルがありません。